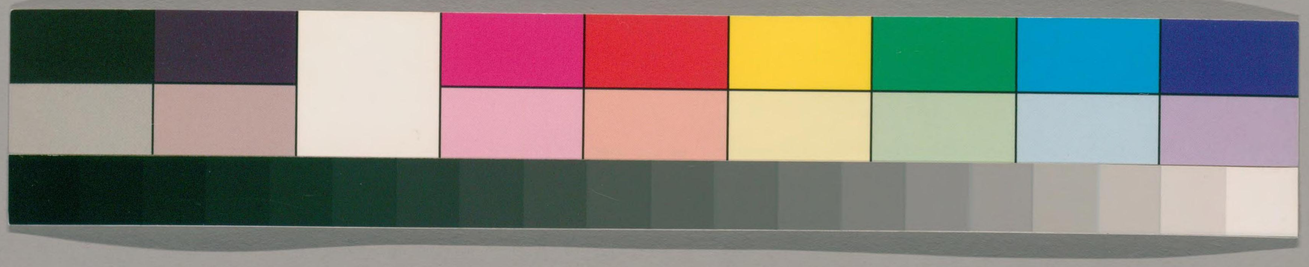

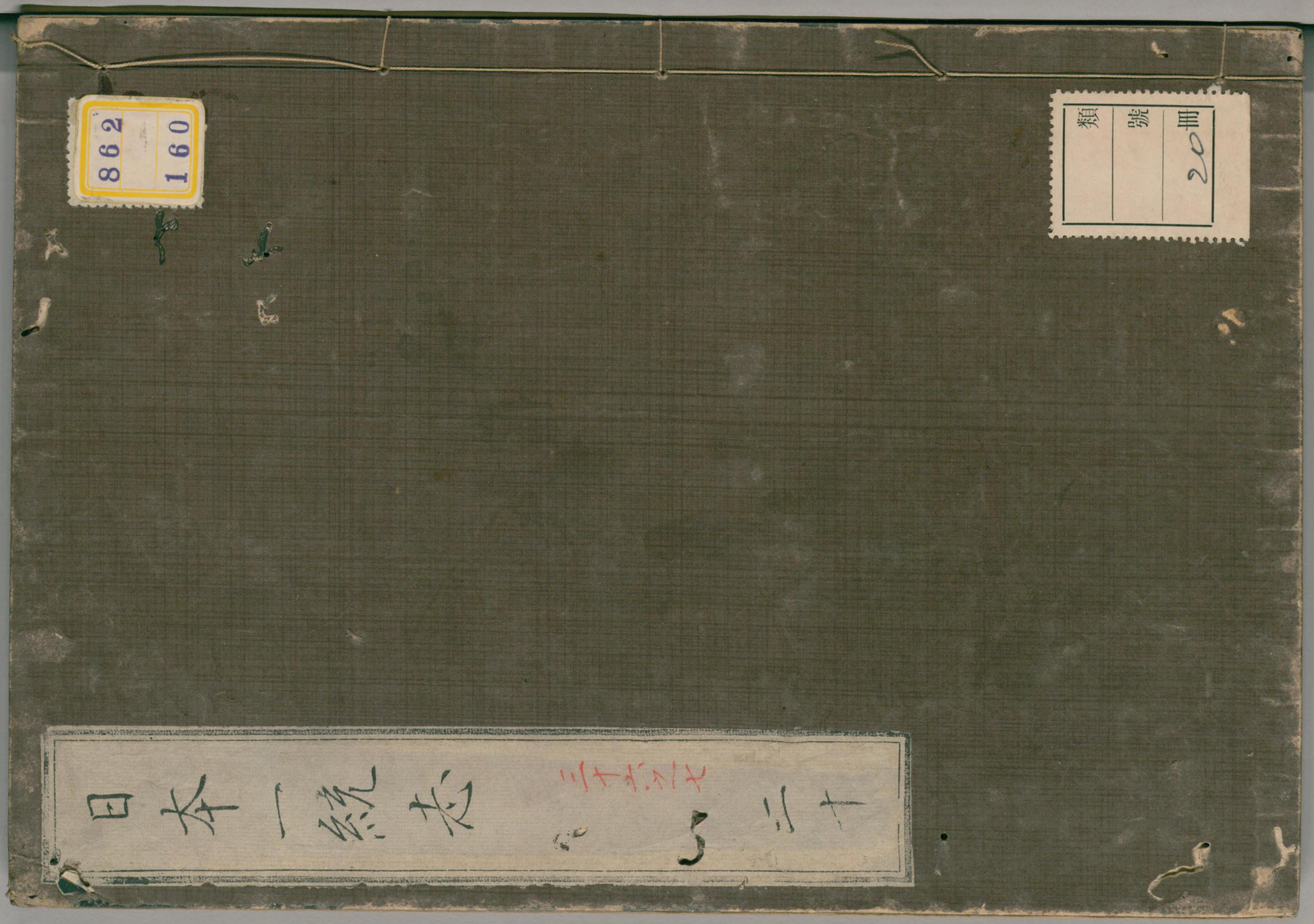

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

日本一統志巻之第三十六

目録

渡辺以大勇山中城責入事
附松田内宮自害之事
并殿下以十万石欲召出渡辺事
中村式部賞功之依不足渡辺立退事
附堀尾茂助賞士馳走之事
并藤堂高虎以恩賞渡辺ヲ引附ル事
小条左京亮備奇計事
附箱根之仕置并法令事

帝国図書館蔵
福原繁三郎氏記念図書
福原達夫氏寄贈本
国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

特3―2

並渡邊武備派爲嚴密小乘二方引入事

家君以御親察秀次備食事

附寄手總軍仕寄并手際一匹之事

小田原城攻矢入之武式小早川行實之事

附殿下寛活故陣中ニ建推女事

並家君以寛仁曲淵ニ號倉ヲ許下度

徳川丁場甲州組持固之度

附曲淵呵武功之將大云之事

陣中裏切之風說流言之度

附秀吉公嘗惑甚多事

並細川幽斎弓妙之假歌詠人定事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

特3一1

帝國圖書館

日本一統志巻之第三十六

渡辺綱大勇山中城責入事

附松田間宮自害之事

并殿下以橋本石斎召玉渡辺綱事

斯て渡辺綱勘之儀ハ山中城二の丸三の丸の石垣堀端に狙ひ寄、貝の中成る極頃を手に喰ひ呑物まく堀の水をも呑たんまくいる家如く鵜の上よりも動き落し味方の血流ゆしを南へ上りしの人油水と化ついとんを割ま象の後ろ成渡るまり膠兵粮をもて

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

向ふ敵方橋の向ふへ張出し防きけるか敗走する所に乱
進み来るを引掛りしさまより味方の兵多く踊出し
堀へ入しかは橋に寄る兵とも急合図にて城方より立
出しける処を渡りて切入居立ふと声大音上けて敵
を呵り付味方を励し勢を添へくれしかは其人
常千代様の兵をすてえん渡る者を人に力を入れ
を味方勇を出し橋の上を渡り敵へ掛りしか敵兵
其日渡りし城の傍の家を放火し敵ゆるかり
と橋中より引入りたるを不透城兵と打交る所に付
見ゆれとも然しかは稲葉大将殿を以三の丸より攻
来りて続く突立しか只今立んとする木戸城
ある人騎まく突張り立させ其味方を通しける
渡るを見て稲葉大将騎かよりやかたと我云ける
出しより二の丸の内まて證武者所々に相図しけり
か渡るを志ての老臣まは先をあらそひ声を掛けれ共
方落城をは不知か欄によりて早く落よりと呼云
跡追かけし城の兵とも突ことや思ひてん渡るを
手当んとも甘ん本丸へ参り有り落ちまさ度もある
有りける渡るは本丸を仕掛ける出み気色出しか
大松大松の陰より鉄砲を打ち事頻りなりしかは

たゞ頼んと存羅蛇の氣不知とも極に成りて擲に
より早業迚より大死せざれば迚きは悟しと試度
起くる掛て城中に渡すを簡を提思ひしに敵りしは
也と心得言わしける
夫より渡る迚は大松の枝へ。太郎より本丸の内の梯子を
見迚は悟は大成廣間なりて人多く擧り合居所を
大庭へ成りて飛出ける武士五百人勝と見えしが合
見え隠しける敵色神妙にぞ見へて勘気に候より
津の大木へ上りて同名源七と見しが勘気に
向かひ付人数申さりしは類少入は其ぞと云しを

忍度眼にして立武者も居武者も木（スクム）と云ものゝ
事なり何百人有りても皆死人同然と見付下し
て方々の篭城の死人共と同事なりと云捨枝迄
りしを本丸へ飛下りし手継ぎ其の際を足踏み
極めさせよ大将を生捕ませよと云の。うさを取
て只其人実掛し本丸の小泉弥太夫より津しる
もし渡る迚小家を揚せしや立喋く如く大木の枝
より飛かゝり同苗源七を始渡し了其の外七八
人実て掛りし跡一族郎子の兵と見えしが城兵
悉く角矢倉の段へ引より其中より亦人斗に退

に継を持て突て掛りければ究竟の渡辺なりと云し
をも視遠に迷しける城兵の方にも是を人も掛声
なく立向しかば死人に同志の事と見へてありし
所なり是義勢を失ふ所為渡辺大の眼を瞋(イカラ)し
己等命には稀くさるるかと呵り付て押き立しかば
一継合しものも有て継を引寄て取てよる所を源七
を始その外共押掛て十人斗討取しかば渡
辺其の子の者を始て半分死するは腐る首にて
柄なる門の息を不異押込て押き落せと是非冷
しきは事万実に高の大勇とも可云候と是より其

陣方には渡辺それ人々と云の下知勢力に励て各人並
の者も梯群強く寄て櫓の辰引付て入る事
间なる處櫓の狭く狭くしかし城兵それ寄にも
卑(ヒシ)より押き込立右の方へ推て落しけるの兵不知負
猿人斗も立こらへよより突下さんとせしが渡辺下
より只それ人なり継を取て押き合て四五人は押ま
落しけるが中る三人力の者とられてる傷失はさ
こらへし知渡辺が後より助来りしる渡辺鎧の尉
錣強飛若武者大人斗押続き新手を取て可
押上槍合より前邊に掛るを見て城兵叶しとや

思ひ寄ざりし騎馬なれバ遂てに此浜を二町ばかり押よ
せられハ少しもたまらず浜に城兵数百人並居たりしが
其中に城主松田遠江守清康盃を持ち腹切て
討せ加勢の間々又豊前守等其年謗[?]腐に跡腹
に成ぬとて云ひなし合同して腹切てけり老人自身首
を権[?]落し果てけるを見て腹切るもありきよく
顧して落度たることも侍りしかハ渡辺が脱の浜に
引立居たる若者共は柄の入替して能敵を
死首に出すと嘉[?]嘘松々申して又橋のめしを冷[?]
中に作り置しと中村が勢渡辺にて渡し兵共

叫と叫入ぬ
八十人斗の城兵の中に兵を合せ鎌之浜より二十段
逃しけるを廿四五人彼ありし渡辺是を見てや弱き
其の者共ハ切腹ありに此の合に臆病者さへあるとの
欺き兵云々桶腰也。かりと吹出し大笑して安穏
本丸も出たり其年内日渡辺党人々働ハ古今
無類と云つべし篠原が處に黄母衣の者の中に速水
甲斐守郡良馬正三好丹後守三議宗来りしたり
殿下よりの飯[?]所付りて落城の見分なりしか也三
議の流甲渡辺に勢を掛け内日出丸より本丸と

乃隔雖早くそのもなく渡邊氏人の隔ありとく
衆議まと讃侍りと云ひ遺ましくと感し宗也を
家中中丸へ衆入他の勢ほくとえんとしかは渡邊
急ぎ早足なる若黨を中村備へ走らし式部か備の
馬印を召寄せ早く山中の城中丸の櫓へ押
立是まで渡邊勘兵衛大音上げ山中城は中村
式部か備足軽まで乗取りと四方へ響く程に
呼はりくと諸手の勢衆入続きて持後手負
の敵の首を討取しく家中に味方に手負
死人首を取りし族も餘程ありしと也

中村式部か備は城の際より馬を乗入渡邊をは云ふをと
其の異名の手柄無雙の勇士と二度まで讃し
かは櫓のとかりて難き清事くと笑ひて此雁の折紙
を下せと武田信玄の時より若年の此渡邊三人
覇魂一生の内日本へ響き程の高名三度は不知
二度迄は一方の仕若たなりとかく此度の度々時宜を
掛給ふ事はなし。赤毒く此雖杯の讃事出来
武功近く出まで武邊奥くそ行まかせいと云し
とかや今日秀吉清ま陣より中村式部か備方へ
使度々の使使三度まで今日の大忠當表一ツ

の高名ありけれハしかし諸軍の見物にも及しかと
中村式部少輔か関窟へ寄る事をも承て渡海
勢を挫き故郷
然るに諸勢混雑しける処関東の分捕せん事を
依託しをり渡海ハ中村殿の若党を一人召ぶ散
所へ付るに城中よ図邪の知行いなるへく財宝を之
知行を争ひ是慶人数を乞ひ下知し
式部少輔例へ馬家寄せ山中の城まて馬廻衆
是皆多年の武者なし此十人と合めたる乱入しるに中
軍勢を掛しより惣軍に成事古今の例に候

是より小田原へ続きたる葉山躑躅山続くして勝ホコツ
る味方の遠近を窺ひ討るに覚えす他人の世話を
ハ不知焼跡万斗ハ甚用ひ可仕とも中村式部少輔
計なり何の所に依を立可然とも有る渡辺
中ハ何の山に続き廣き所のあるへし中に此
所に旗を立合勢を集て敵と見えし所も
多く族兵と斗式部少輔中村渡辺策ありて大将も
智謀を以くハいへを同日の様に人の作せなれハ寄
のこしたる名誉有故にいと廣き所に仕置の所
に勢を揃へ中村式部少輔一手夜雪大角の様候

讒言なしける此厳室の使取りて依て秀吉出陣ましく
用ひ返りんとしけるハ関白殿御覧して頭を御撫さいけれ
何の恩ある毛のを某志津ヶ嶽にて今の武功顕れ
略つ見損し一度河しを勝之何程掲とも申上候に
不用末惜きもんを中村か家来ましく近なく今日の
働き唯晩の使之ハ秀吉陣中兵今との見由事之
と有て癖の無き秀吉まて密に渡しを呉れんして
申上候に所かいりく十万石ニ而城主四承（かりこ）の侍従ふるへし
と御使当熊谷内蔵助をん此中此たさ付るれ包
今出続候え持参せし故外のもんハ今日渡初の働

當座の御褒美被下物よと存居しに熊谷の言
熊谷と申ハいて渡邊ニ申付せしかハ武功ゆと不及
熊谷を呼りて関白殿ハ十万石の知行を頒ちと
思ハく早速申上候に某と思召ハ口惜ハ志津ヶ
嶽の合戦竟の不覚を中村律と成て来申上い〳〵
散々難云をん何石まても唯一井と思ふハ急兵
武田の軍法ハ味方井を嫌ふ故己方よいたよ
百万石賜りても家ニ入る君ハ持事難成を候
都て此節此会ハ当ん有事なり某ハ中村方の
家人ぐらの家来同然入用何事ハ武将方より貫き

中と云鉢縄の包合を投出しける執念けし
ある侍なしけれ人事顔にも程こそ無と思ひ出しか
其外より酒を好る迚引続くる人呑して無者
まと呼出なく盃も受んして酔ひぬ程に成や否
鼾睡の体なれども無者内蔵助も此程果てて立
帰りける折武蔵へ智恵万端の渡邊なりしか
其外を諸州の事云り辟易大なる事此の
思しは誠に千万の行き地あれや
・小田原清津後封国の賞典よりしぬ駿河
国一領に中村式部少輔頭領有りしは偏に

渡邊より武助あれ人依に式部少輔より一分賜
七万石餘に高まりき万石も彼渡邊と希ひ
成千石餘り渡邊にて不足しけるしかしても異
にふ出しても家常に風流の眺望を好んで
稲に軍労を忘れ彼名当国三穂の松原
は駿河なり此地を経り苦労を可慰と申て
成千石たいに清然たる此地は富士に続きてる
京地とぞ云清みより続く堤ふまて三穂の
松原迄内館地ともしける知行高六千石斗
申て運上も式千両に越えり渡邊は知行二千も

運と命も弁へ不知して己か眺望を好みし
中へ入ハを我身お浦か頭の近辺出此度渡邊か
一人の武勇をたのみし五千石の高知を指し
かハ我身お浦へ譲し渡邊か武勇ハ人の免しる
勇士なれハ欲心深し己君の家臣のとへ己か
胸算用なれハ北方の高千石餘を増し運と
の所務ある知をなハ非義士私欲のとなん
飽と奢るとの形を得ん有へしとなへし
かハ我身お浦か悪量律儀斗ありて遠慮の知
おきなハ勇士を親愛なる情慮ししとなんく

思慮しもて己か知行所をも安堵するに可なとハ主
を蔵せずして所務ハ何程の高細か出来
且領不知の諸家勤を記して不知五千石を領ハ
勝手にまかせ所需に致候とて渡邊懐て渡邊役
立しもて家来共を引連て御堂に京都へ立
退き浪人しけるが是ハ渡邊か器量なりしを
売方石ハ惜みし中村氏ハ甲斐と云者なれ
流せしを渡邊取入もて志を任しと偽りけるもの
渡邊中にも宜き細ハ元来某中村の家来にて
ありし實否なく然れハ知行の高少にて候へハ

渡辺に返しけると説云事ハ向後殿士と云
云知行一粒も不遣當州諸を可申請とて
八橋人種の猪を或可浦方より出し荒廼
ぞえ

中村式部賞功之儀不足渡辺立退之事

附堀尾茂堂忠士説之事

并藤堂高虎公恩案引附渡辺事

慶長五年関ヶ原合戦之節関東方大利家康公
御威光日本へ秀しかハ大小の恩禄悉く施一不
の斟酌ありしに帯刀先生堀尾吉晴ハ堀尾の武
功と云家康公へ忠義の次第委細申上
出雲隠岐両国の主と成りて都合廿三万石餘
の知行高なりしに先年より渡辺勘兵衛事
然る入部の後於雲州新城の地ハ當国堀尾の那
ハ左敷の殊京たく南ハ湖水あり蒼海ありて
漁撫の場究竟の境なり渡辺ヶ様の所を好む
堀尾の一郡を以渡辺に宛行可申と京都へ
使者を差遣し知行高を急度極め申
弐万三千石と成り堀尾帯刀殿兼て恩禄も又渡辺
に宛行地ハ一万石より内にてハ能しからず居不難

其丁寧にもてなし相待ける故世間にても大
家までも名士を愛し好大名も多きその中なる姫路
廿一万石餘の高にて新しく来る者に弐万三千石とは恐ら
く君命の宛行と各思ひしに藤堂佐渡守高虎
能く出京の度ハ上下を着し懇勤の禮を以て渡辺
か住居の覚く見え旦米穀を送り懇志を運ひ
其志を厚く交りしか渡辺も殊に喜ひ存られ
後伊豫国ハ殺京の地よりハ君にて度貴居への往亭
あやけ出来の不能とて一万石有他国に甚つよ
納舟漁舟等に掉を差しハ唐土にも漕行には問

使をもて遣し於下向ハ了高虎とその日より上京有
聘禮の返答事あり国の朝にハ有とも日本にハ類
あるまじと思ひ伊豫国へ就しに藤堂方より渡辺
于家行如の知行も三万五千石にて仮ハ前後に違
し雲州へハ一万石の我姫尾足摺して生涯の好を
此事なり藤堂に継して猪の極成の本相渡辺を
いつの間にか出して背を憐荒したる事と詳に
ぬけ大名方懇意の渡辺出来しても教の恩量
をいたしくりて後年於藤堂家天下に名を施せ
高名はりしと承る

北条左京大夫儲斎討事
附荒木ニ往還吉分事
并渡辺武備後守厳密北条方引の事

扨も山中城落城の後小田原より加勢に籠ける
北条左京大夫ハ同宮朝倉兵人より八年若兵共
黄八幡と云し上総守詫して城を退く様して
其の若手従三百人を足日比遠志の若兵共十九人
覚ん有者を撰て都合三百人の小田原勢山中の
岩下成旅人の往来ニ方へ近日の営をを
待て是非して一夜討して上方勢の肝を奪んと

まかしける如渡辺隠居無覚の智ニ息中村ハ
備たる嶮姐の中成ゆゆ勢を立て鉄炮を返同
に張らせ何方より掛りける夜討ニ兵呂子共
討と人数を配り簾白重のして用心堅固なる
しかハ何れ入通者もなく依て只片時も小田原へ
近辺ハ一先つ一先く不落着只の一跡より後し
志ほ何ハ物見まて近と三百人一ヶ所中に候
の先陣近江中納言秀次人関白殿より使ニて
夜明ハて蓮山の城を押へさせて様飛堂も地蔵堂
辺を囲み三枝独く誘出させと云渡辺ハ本ノマヽ

此所ハ箕輪の往還と處とハ別なり但し元ハ箕
輪より六道の辻と云へる處へ出三枚橋へ出たるなり
此道芦の湯にてなり處の道よりハ近し
此所ハ早雲寺裏にて境内廣し
處ハ狭し

其のころ箱根の此山中の谷より小田原勢より
手勢三百人程を篭め置かれしが近江中納言
秀次の陣へかゝりて一戦の敵にまかせ
乱を散々事これのみなりしが遂に山城を押く
諸将と小田原と六里の内にて敵ハなしと油断

せし事なれハ敵将士の事に従言語を若干知負
上方勢を三備に追崩しけるも上方勢弱く小田原
勢強きと云ふとも掛られ兵上方勢ハ案内不知山
中と云ひ中なり小田原方ハ常に勝利を得る山中の
案内者たる故なり然れ共秀吉の本陣近く可被及下
知に営宮より渡邊が勢ハ諸ハ旗本中村式部少輔
備を山中の谷に立大筒焼鉄砲打かけ一時詰寄
不寝番の兵一面に備しかハ弓鉄砲を放し掛かり
幾度も戦ひ堅固に押掛りける秀吉の本陣へ
矢の当る道筋なれハ檜を以て打たれ居たる小田原勢多

遠嘘をなし小田原へ引返しぬ。
むなしく其ものともに千百人餘り手負討死三十とぞ
上方勢ハ火攻に手負その三百人餘落なく五百
人ほど討れ手負ハ石和負と就季
扨も小田原城中ハ籠城も中より上方勢當春
発向の御沙汰を聞と等しく七ヶ国の人夫四万人なれ
正月中まて普請せしめ正月末より三万人の追手を
掛て堂塔石くら廓々まてに出来しけれハ程なく
上方勢百万の勢寄て其籠城杯の後に思ふ事
兵粮ハ七ヶ国より取寄せて士卒ハ関東の武勇の

者共を籠め矢種ハ相州並武蔵并縣を城
内へ入れ入る々職人小屋を作り並べて日々其せ万事
無滞しいまもしの驚兼粮ハ両国ハ一両年支ぬへし
然るに徳川殿伊豆国にて上方勢を下し立ハ其
るまじ。よしや家康何れ不運にて甲斐信濃
駿河三ヶ国を秀吉に奪討死致さもハ
上方勢ハ半分手負死人東海道を可埋と云謂
留めて給ふ末家の世の習とハ夢ゆとも知事
なき愚なる其然も古小条家の勇士各集て徳川
家は地に歩しまりハ差し当ハ味方の武備大事

国立国会図書館　　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

と心掛しかハ深く密志の韮城同宗とさへくら
然る處二月中より徳川家を小田原攻の総勢小名
よし風聞しけれハ實説たま共北条家思ひさし
兼く實の一味ゟ不つきちまもまれ家康公ねしうもハ
略奇代の謀ありし態と上方勢と一同して至極
の躰を見合之夾（ハサ）んとて秀吉を可去れ智謀を
んと云へる頼母要思ひしと當山中ゟ城の旅より
徳川家ハ先陣なりと云觸し聞へなく山中ゟ城
と峠と筆頭十八人手七八人ハ兼く此徳川殿を拝ま
せハ北条家ハ擢ゟ様の御悦ひしと唄ゟ食を取りし

刻早根山ハ悉く上方勢なりと海陸し家康
清勢ハ小田原へ一ミ責可取りサア所ん於と世し
罷越の歡となりさハ大事なりと家臣ハ海邊分
も里よりし山中仏易しと家財及具を持運し
り俄ゟ山より里やし海邊の若イいと見えより鳥の
立より此事ゟ其澄動不斜振く兵士の気も同
然と見ま於引立ん弱くなりしかハ石戦前ゟ
勝負の見えんくより云程ゟ秀吉公ハ升中ゟ侍様の
軍法九密議発明して於ひしるよゟ家康卿よと
縁身被見兼根山中の様ゟ各間ゟの推ま及近

要しのぎ其れハ廿六万騎の大軍を出より峯々を押
寄る事大軍ニ苦所なしとの兵書の言ニおいしも不遠
也押ニ箱根の嶮岨も構ハ之給ヤレ山中ハ皆上方勢
ぬれぬ續さうと云ふ程を手を防ぎ宮城野口湯本口
竹浦口の三ケ所の兵とも壱人様ケ二人様ケ毎日毎夜
減しかハ大将くも不及剣体ふ及是非付上ハ四ケの
勢を一所ニ集城を堅固ニ持参しとて卯月朔日の
朝ミニ皆悉く小田原城中へ引入しかハ無是非加
豆其れハ羽柴秀吉公ハ去ル山中落城の后小栗左衛
東より病討の后健の勢ミ秀次を始取かしし家を

請覧し秀次公へ御使を被立秀次公ハ小田原攻
入勢押徳川殿の跡く續きハ旗を前後としかれ
箱根山の体いかが思ひし所さまへ漕参しる
小栗勢の船號早く覧ハ味方の勝軍と思入給し
かハ家康公御勢を率越されんとし給を家康公
請取給ひ被成りて三月晦日の夜村越茂助をもて秀次公へ
被仰きたるハ敵の城近く參掛り山下ニ陣取可仕
事ニ候ハ請取候ハゞ城近く請取候て請引可然と請
呉れけりしに依習の者をもて請給ふ事ニ請使へ被
差出し候様被申を被下者常ニ日夜引退けり敵方へ

勢ハ猛けれ共頼めなくいはよき時日をゆると百一
風流の様くぬ華麗なれハ家康公ハ本ことによ出
中納言秀次を見て請たる事とやはりて華麗流人詩
事ありて是を中納言殿くるを時日とや扱ふ及ぶ
云ふ程ハ上にはい秀次公も雲ハ殿下さへ時滞んの乃
時扱有徳円満なれハ早く無しにはと有る花瓶を
秀次の前へ小姓に取出し置まする秀次請云ふし
百が出知らぬ形をむきは出し大音上て呵りけるに是
中納言殿奇の連歌をいふ能ふる時節ふの軍
時ハ何んとして家康の小指の爪程も有まいぞ家康

いふ者の為を申上つる又山中落城の時にて
迎と申ゆへやむるか家康の眼まもい物もし御故指南い
しられ不入敵小勢を申すると云ふ物さといやでや
勝の笑に事早く此陣を引て山のよ敵の出る
も迎へ場の旨は不〻旗を請立やもと云しは荒冷
申候と云ふ成すと云〻共家康公は請ましと云山中落城の
時不申の際は諸人の眼前なれは秀次公もいふ事なれ
為さる様に思へしと共其習流まん日には請を承
中よと据将しか秀重は村越茂助康を以て云財を
かけて来て頭一甲を差しける故何合ぬ松風松雨の

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

まの中納言ハ軍慮かしらぬ話を聞きと申せし中納
言ハ公家を止メ武士に成り度さるゝよしなれとも
只従者に謂りし由ニ此駿河まて能役者出来
謡を教へ居りしか松風の謡を仕舞ひ居りしも今年
方なる云能く花香成事まハ甲州に三河にて遊芸
と見えたり其後秀次にハ村雨薄助を絶名を付
しハ此芸の事故なりとかや

家君以御親察秀次備合事

附寺に於軍仕寄せに深匿之事

家も家康公は方ヘ参まハ信玄公之年の名あるたりしか

千葉之助後近年小田原家と和睦し此表へ加勢ニ
来りけるハ先年天正十年武田滅亡の節信長之
の使を追返し首頭を刎て武田四郎勝頼ハ不運ニ而
しかゐ亡び給ふ千葉之助後ハ代々源氏へ出仕しつ
平氏へ出仕しける儀なし信長ハ平氏とおもいハ千葉
之助に此方同じく候ハ信長成事なりとて夫より
成在之しけるか信長も其首を武田退治を大将
し早く陣有りし其後関白秀吉へ出中の
中まと千葉之助後ハ信長亡せれより羽柴秀吉へ
手を入る様とハ何分体とて居しける不在近年

吉濱公方家没落して小條家と和睦し幕下と
成り古河公方義氏は先北条氏康の聟なれは
引取る所の度隅田口を千葉之助為大将下総
勢を以て引合八千の兵籠りて堅し下総の国
人數五千人悉く逃入し千葉の兵共氏政より
使を立城中へ引入れ帰と申来るを以入るを修理
念を万なるは引請ル一手に付て千方勢を争
懸らし城へ入とて三千の兵勢一人も不残
かかる三月晦日の夜半より上方勢の中より一の先を
仕掛し秀次の備を乞をして家 徳川殿是を見

所仍て秀次の勢風祭の上成山城へ備をしける
家康公備と向ひて上下谷村満し大筒を焼
續け陣先し千葉助宣るより風祭の山乃所
兵を勝し毎度闘遠兼るには是を見合静々と秀次
の備は下を引て小田原城中へ入早秀次先引の
兵の山下を勢を押出し陣を敷く落去微塵に可
致有と敵所を見るの一言は定まぬ様と云入り
去る程に天正十八年卯月二日より四方の攻口を定め
上方より六万餘騎なれはるくと引包仕寄を付て取
貫との間仍ち諸大名一手々々仕寄を付る事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

家々の手際不なれハ我者ふしと仕其の鉄を
手延しもんと候城中より茶彫矢射出し火出し
ける故此其手の中ゟ戦場ゟ副人々ハ取の外不
手際成事共なり長島我弱と大在侍長の為仕
一日の内ニ四度まで仕其をす損し城中より出て火を
取の外ニ首尾取りて外家々の法ありと云へとも
只今まで今程の大図おくて頭の城中男女共ニ
十万近き笠城を攻して事共ありし候ひ形のな
き軍法ハ大概の様り手を以て自他共ニ嘲く事
然ともハ十人ゟ九人探り足の城責前々仕其の手段

おもて手際の陣を見届く後日殊判を思ハ中々
余の毒ゟ方成事なりし千万徳川家の様
是迄近ゟ主実の敵とハ小田家ゟ存不申其ゟ
一同の事とハ名云責口を結れ之節を候所きハ
焼り家康公ハ御氏直を請捨させ関白殿の
味方ゟ究しりと遠慮を為せも尤取て候く何し
の攻口よりハ徳川家の責口を城中よりも大切ニ
存仕其を分前ゟ職務し捨よと云合せ一番ゟ
武州忍の城ゟ此国下総ゟ氏長四ゟ餘の兵を以城
中より抽朕妣を揃て陸々出して来れハ卯月二日

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

辰の刻より仕寄を被為付、卯午の刻を最後に持
楯亀甲を打手倒して雑兵の手負に為勝人とせ
しかれば既に虎口を打返して仕寄并損んとしたり
程に家康公御内通所被成て他人の奉行城を取ると
遠て敵の中より若者の輩氏政が笑んでも恥ぬ
仕寄をする斗の事には醜と仕る勇士共をもって
何しの家まで主人まで荒この塾に事を仕
課させしたる者見苦敷事少年のなり当手の雑兵
先年に戦場へ出て勝負を論じ当手に御て初心
の侍に可成不届なりと御の所作之段を見て候

榊原式部殿指図には清光に経たる者共悉く
当手の虎口は六ヶ敷つかまつりしよ拙者娘密々存
備にとは申て候んを不可然悩ぬ結句見苦しと存じ
よりは当手中の疑を散じには不手際の方も候
為に防戦と神妙に指図にも乃重ね奥深き康政と
申感し合へり然も仕寄の役一二三をもん法助の役
しける右一番関は遠江に二番関は参河に三番関
は甲州に而侍に而駿河にて万一仕寄附悉には人
まかせの方へ加勢との定めなりし然るに最を三の
丸一二の関を押掛て何の造作も仕寄并損さ

んと思ひしが存の外戦に負死人出来一体二体
至りて甲州廻く手渡して甲州元の如く武田代より柔
ケ様の者は北廻新廻の足軽とも宰領と成りて水腰
の者を伺ふしき交り貴胁仕付ける事なれは申さ
れ迄し格別ふしぎ好き仕舞ます可んと出候比
城中より廻ひ渡し武改旗本の千人廻の足軽三
廻成田の主人勤来りて千挺の鉄炮を一度に打迎
寄れは仕舞なちて諸後に負三百人余に及しかは
甲斐廻所然果りて咄と崩ち虚口を逃んとせしを
小田原城中一度に咄と笑出して男の様は是者

雑くて智算の器量勝とは見えさ智算の様先強ひ
たゞきんさいなと囃立て終く口惜しく甚どよめき止まず
る内に寄手の徳川勢の後より山鳴叢に当りて
来る者二人味方を押し分て走向ひ鷲叢果
居もの中より大ちからを。ぬつと立出しまするての
うち立出しるは曲渕庄左衛門勝子光義ある人なりて名
是れりし腰ふさ立ち何しかま来ときて甲州いざりて危しく
と名乗止かる知田渕大音上て味方の中まで合
三番仕舞は甲州廻よりもや付損じまいと思ふて小
屋に酒呑て居るを不知ヤレ三小島も討死ぬいと深き

足る所領の役呑潰し喰潰し・又寝ても一石と
給れサア国の者を出い其等が来ては済させせよ
い逝ぬと云合へ唐言持子大蔵大音上々三河
一万軍兵が裳長に引摺る衣装故立退しか
兎ひ弁倉が仕出しの竹策をかせ立然四功の
虎口の手際に大名持下知も軍兵も前引も
物入かヤレ竹策くよこ古人まさ云甲列組より出
してる竹策い慈る持る近兵小隊への甚なく
も取従しく竹また来る地由測り々に茶
の小隊の昴遮斗脱しまい暁子寝ろかを土地一卦

七よう所いなし大将殿の武者共も引脱しそこい
云遁る実進よと不利の敗れも厭いしく棟有
採んを下知しヤレ郷組新組共こ子兵孫旭より出
玄あい云ふやと云より早く太刀を棒持て尻
より薙り立足し退くい子劫桧揚子又見て一しかい
新人兵の働き一倍しを半時斗の内に百ずか間の
仕出の以を大概除の方へ信濃元和人座光る
大将等の人々来く信濃松の陣営その兵ぬ百人
借りしかい中の上割ていなの所仕出す課せらるし、
悉く皆持子曲測を如い能ふ利よ皆と人の利しる

故形見と諸人感じける時に岩城使井伊兵部少輔
家来をあまた召し明日は両度を遂げ解き甲州迎の
由緒様別に浄満院の後ろ守る由を達し
希望は出羽殿をむき出し兵部殿は無く大将
秘蔵の花兵と申せけ六ヶ条虎口にて取ても出るも
見るその形は年四十余る年をいはなくて浄満院と
いひ何んのすがらや是を以て云ようは示あると云
八千宮たと言わられは猪子ずは黙止ざりし信玄
有り土屋諸信小河田能角大形猪子が能成と請物
の羽を届るとか一度くろまつた物と存たまはず

武蔵か尾は知行に取らぬと悪口申し放逸早く
家返し佐竹十分に付申すと請猪子申上別て猪子
出羽殿引所要返知人座見も大鵬の去兵法
出口と成猪許申しては家康口申ける甚請顔色
依然として出羽猪子め猪去忠義ようは家地を
猪く身の内れる跡も示顧懐ひその元か早く
不遂之事成ると請云の下に出設ますとおし悪口
の後を済り其と何事か々も請兼て包む事成れき人
なりし猪木や是に出去氏は不利と猪兵は無く
陸奥利申すと請申上しかは何の気言ふくと請問申し

件の者まて申上けれハ家康公御出陣以来の高笑
し給ひにて御手を叩きと云ハ。是ハいつもの事也り不去
おしと気にかゝり掛ける程賞美しける法性院之
猪子由別か悪言をハ免し置れしと織田信福
来馬鹿ニやかれる家康ハ諸国呼のぬけ大将にて
大の跡継かくすまいうと家の毒に思ふと申し給ひし
を榊原康政諸家を招きする由別か多も早
能ク程の使者に遣ハせと申し下へハ能志やくと
諸将に語りて大久保忠世ニも見くハ語るニハ由別猪子か
出来申と康政は笑ひ申上けれハ家康卿猪

婦能まし〱諸笑ひ給ひて其方とも不覚達之
何ものハ三河者ニ出来て本多忠勝か子ニも志やね
也と今日の諸将様ニ御手申諸河酒を所望せる
呑せヘと有して後一樽遣けれる処猪子兵助樽を
商人か手中に持ちて諸使の前に向ひて申けれハ
不申上信玄も去年ハ大将なりしか其后今ハ度々貫
ふる家康ハ負色大将か一度ニ全を見めされぬ
とやせしを猪子樽の如くを挙て張り上する
うゝ大将の出陣なりて居れる此方もか負色の生し
故尾下りしそ全ての者ハ大将を見せ給ふか是非出

梢と家の甲ハ氏神の梢より運と思へハ毎年梢を
半分を取て信濃へ来りまゝつかおしも尓合せ
ハ人まゝ一梢を足ゆべしハ能くよ戸とらとなんく
しろう

小田原城攻矢入のこと武式小早川肝要之事
附殿下寛治被陣中ニ建柁女事
并家君以寛仁世渕ヲ請合ヲ許下す

角ゟ矢入の規式ハ下としく關白秀吉ハ於此陣號
評定ありかし各矢入の法術條の沙汰あき処毛利家
の小早川左衛門佐隆景江申ハ先頃此度小條家の多

不召兼ぶ無し手内の始より朝敵を比し殿下猿出
陣の事ならば其式をでまい沙と有りしか其近代
朝敵追罸の儀を知るもなし小早川然らば某忠を
つくしよ以朝敵ハ魔賊より事大内の古実と存候ハ
然を椙或方角の内より丑寅を鬼門と立延ハよ全
矢入をは鬼門より始世よるべしとの事にて卯月二日
の申刻四方を巻き諸虎口く立しかハ鉄炮八百挺
丑寅の角より放べし其勢く酉の刻子の方より赤納
羊の後火矢を射入く諸手の虎口くも吁関を
よる支外立万餘の寄勢なれハ上ハ箱根の山立ゟ方

こゝへ下ハ相模灘の浪ニ寄せ渡り家弱き生ハ魂
を消す斗の有様なり小田原城中ニても兵士斗七万
餘なれとも各気おちて屓しと鉄炮を放へむしく
開を塞しける案内者をもつて城方の者も流石
七州の大守氏政の居城となりて神妙なり三日より
毎日のく路くより方掛村の玉縄を防くて談
鉄炮して横様出る近年ニ及の城郭と見へける
大官刑部少輔石田治部少輔両人関白殿の命によつて談
談して先開廿日三十日の内ニ落城者あるへく一万中
悉者共の兵ニ勢路但屋なり早竟弱りてあ

殿は名一計陣下智略にて大軍の陣中ニ士卒長陣
を厭ひて仕様なと窮りきハ関白殿聞召我異く
ニ長者ニ有女しも気を晴す仕小田原長ニ書と各
御の様ニ取してんスと淀宗有て早速淀内宗ゆ
任合て三将の女ニ残代物を取陣へ五百余事
三百人ニ及ひ家康公ニ於ゐ入駿府の又町中の拾
女郎陣中に於て呂下ハ様まとちて此等く代物五下
川を見早速お任をて四日目ニ清水より出船し
鳩女郎五百人餘ハ陣ニ着の女ニして三将女郎
より格別ニなくして然もとし中ニ此方まゝ陣中

事足ましと有りし京都へ家康公を仰を以所司代
徳善院方下知としてし六条女郎を千五百人呼集置
其外下京を此所村々より見かしき様まと結構なる
女の買よ称被陣中と呼へ去より三ヶ所の女郎千五百
人小路へ被召て諸陣中色里を立諸商人名買
以候ことの事取り諸色京堺大坂より商人諸家よ
依て商買の市をおこさくと何れも我もくと
思寸の商物以て市にまさる如陣中毎に幾多の
軍勢退屈の気もおもなくし日夜楽しみ諸家々寛角
於女郎渡賃も秀吉諸家の大名なりきの慰み

博奕を可為ちよ為陣中十三ヶ所へ札を立高
陣中上下の軍士に顧死忠戦のよへ名将よの程
具よ陣営を慰つき事初帰なり且博奕ホとの
悪以を仕りて慰役て為曲事にて張並被路口非
者の軍に吾陣入の可乗博奕事任し喧嘩口
論小屋物て為事右の旨おもに守き忽て何人よ
なりと

卯月　秀吉

如是札立以ををみると吾陣中博奕に大取諸大名
方陣にも慰果寸前代未聞の陣法成覧

城内若者之悪く者にて企候討事

浜者共周章一逃之事

荒使川虎口野脇松平重勝武功之事

然る處卯月廿七日小田原城之若者共申合評談

ありしハ此頃者共ハ廿日上方の勢をいれ天下責囲事

おしも手使ハ越兵粮ハ深山とひ之敵陣上方勢

ハ万事手以て何事にか起る事なれハ長陣の労聊

有る者ハ味方ハ日々追歴出来んハ此宛いさや兵

粮の十分の内粮兵ともまへ一夜出し味の討死

せるか一方一敵陣一備も二備そ崩立ヶ追散して

其よ尾張引て嶋から関東ハ不及申上方之者共ハ為

替成へしと寮ま談合せしか一軍ハ小栗又左衛門嫡

子同助弟と大道寺孫九郎頭とし成て内藤左京亮

役所へ集る其日の首尾を糺しそれハ同志の若

究竟の勇士百三拾人出来せしかハ若者示し合

せしまゝハ雑人大勢召連にてすくハ揉追口より都

魔なるとて何れの人数持たる若党の健者

ましく人ハ太刀を其成て談話の時の為

なれハて召具供ハ足手丸に名歩行まとひと相云

葉を悉く云合父母親類書置して出んと欲そ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　ガラス使用

究卯月廿七日の丑寅の刻限と定給ふ然るに
廿六日の暁より小雨ふりの風烈敷吹けるに城攻
を前延して陣々にて思ひ／＼の物具をとり廿七日
に成りては雨弥降り続き風止て物寂（サビ）敷夜中
成れは筑前の備も守殿は焼事なく寄手の陣中寝
しろからは弥つよくして酒宴抔興し或は博奕の小屋へ
いでゝの慰さみぞさゞめき渡り中にも城中より抜出
の可出とは露ほども不知甚だ結したる虎口／＼の先にも
夜前より兎角鉄砲の火蓋もなく常に百人の役にて
此人三十人余に減して有る此所を城中夜討を

仕掛けし者を見澄し我々運に叶ふると寄せ度き
上下共に年若なれは不及是非此事相談致し候へと
人数持の松田大道寺千葉成田の面々に遂へ相談
に思議の大利を得候得は不知却る歴々の大将共
初めとして止んは必定の所存なれは若手の覚ませよ
と若手にも勢へは不知夜討の大将としる小気勇なる
もの人々退守まを源し大道寺孫九郎政も大道寺
一族中では御若年無用の中村内蔵介の先陣を乞人
少し何もの偽り油断して見ゆると一端に手へ入
寄手の虎口を探りを求めるに土佐守殿長曽我部

は大将年若して妓女を召寄酒宴数刻にて寝
入たると見て陣中おしも用心の体なし今は我
諸陣屋へ今晩妓女留置人斗頭立しるその兵共
家中寝也況の事なれは以下のその兵も憤り
或兵は今夜山拙陣中にても女抱て貴らく我にまい
酒なりたる呑せ楽めと云苦労を積は役にも命
を存への事虚労をし頻に出女寝よしと云ける
よ我武者共は大概寝入油断よ寝ぬる節に
を抱しは老人抔は長首我先か虎口を討取よ
せよと云程こそ何も出てに構出て夜中の人数

に及忍討声も不立寝首を取し敵を軍陣へ討とケ
よと物にえは不案皆長首我先か虎口の諸人働く
こそめん兵より之を早々と討外思して討て
入しかは大に驚き大将之許は妓女と共を伴し
を脱か寝へしかし陣屋よ日出まと許云寝耳に
水より尚周章て女郎の衣裳と取違帯をせぬ
侭にて許逃しかは下知もつき物の兵も之詮をも
同前やし女子共を召連よしと防事抔は夢にしも
為ん態ものを未ての若はた石楼しる女郎
をつくしと肩に負て家へ送りの女を思ひて連

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

立退き山中讃岐の駿河へ入りて夜討に忍ばせ
遊女を買ふと言り代も無理に利楽しみを飽まで
長し立帰るも有り退くものもあり此所退き後ち
ある遊女八人と生捕りて城中へ引入りせ我等の
備より討出百余人を負出百余を呼入れ当面
雖も阿部豊後守備も押寄せて敵を攻め此
度は秀吉本陣の方へ赤坂より出る備も六
備にて寄敵いまた枚小路より律本陣まで遊女
大分の刀高の酒宴に香長し酒を勧めて下に在
八十三備悉く浮気に成りて遊女の合を呼寄せし

栄へしは寄手の陣所も起上りさりやし何事ぞと
先手の者聞驚かしと見ゑまま寝をも取り女
帝と連れ立ちて退くものあり忽ち狂乱の体なりしか
城中の者是を徳川殿を退け居りし故鳥飛投
出る敵太々何方何方と却りしうちに高名と家恩イサ
家康卿の備へ入りて切殺せと押掛けて乱れ入る時
徳川家貴方の大将は松平大隅守にて三州
助見の物も年寄なる故に時の付度若手を率ひて
諸侍に乃る者大高氏の動きを用て三河の譜代の
小身者を引具し一つ之虎口を堅めし小身の組者

西の小谷へ押寄せしは雨夜故少しも知らざる如く城
内の兵ども皆我劣らじと切崩し多く討捕れ候暗
打成るに切入しかば大隅も是非なく四十人斗
召具し素肌にて漸く小具足斗の者を召し
東の谷諸きしかば大隅も味方不覚なりける故
討の城兵を三人まで手に掛け廻れの高名取りて
志ある兵数千押立て退けば廻り元一諸駆け
走行しかども中々敵支へ思はし小崩れ

徳川丁場甲州廻持返之事

河西劉武功之件呵大言之事

若徳川仕寄口城兵数多入引上る事

此事ハ家康公御目覚の士故驚き思召御陣
前の後備を召高力河内守清長等を後見
し旗本と共に備へり今晩の夜白三河の甲州勢と
御手の所へ御使者横田甚五郎御前へ参り次第
出勢のこと御意を兼て三河先手の者押立
以後敵を退け五能の加番の甲州の者として
出家に候へ悠々押返し上は追て城へ追入可
申とて申す所を家康公御覧ありて生田なきとし
三州先ヶ様の者とは間なし利(キカ)せて横田宗兵し

押揉せよと使川新蔵に命じ甚見して使命を
新立處へ甲州方より使を家康公旗本陣へ立申
上には一之先三河衆追立に付兵虎口の甲州組ゟ
取巻て上下出馬を乗出候者は不二惑の夜討と
申内々を味方の中より引合し知らせとの儀
を米倉主水と云者申上れは使者検見新発意と云
の注満家康方へ忍者の通て申越せ事感悦ちり
候様の加勢組を立に付と有て内藤孫次郎
一手戸田三郎右衛門一手大久保七郎左衛門一手都合三手
立掛て御下知新蔵に使容なおしを追間

然者三河衆の跡へ駆出て夜兵の城兵を防し
兵立てゝ甲州組まし

初鹿傳右衛門　土屋平三郎十六才　秋山十右衛門
柳井市右衛門　津金長物　曲淵市之丞
坂本小兵衛　一宮左太夫　嶋田十之丞
小宮山又七　石黒八之丞　三枝宗四郎
河原村傳之丞　日向傳次　雨宮庄九郎

此その兵其異の体にて名付功立し中にも
曲淵市之丞十七歳三枝宗四郎は十六歳にて初陣
なりしかども祖父者ふめ大剛の者共にもまさりき

野宿あなたに

に進ミ玉ふ御の忠義事古老も可能程るへし
初鹿野桜井河原村井上まて武功と云搆負を
論し勇士たる五人家名まて志ある故より勤
立しかハ信濃衆の加勢蓮華寺大将を次々
保科の家来十人余り召付操之を知へ後詰の
甲府衆まい
小幡孫市　武者庄之助　伊沢之助
先筆と一所に来加る信濃衆ハ
諏訪小太郎　春日内蔵助　屋代越中守
いまた合せ八指人斗の連　信濃組ハ標様きくと

必す手読なく出張より突かて入城兵を突立
此ら敵思ひ動かる小田原方旗兵急ぎて標立たる
討之の六指人大道寺孫九郎提灯の若者すて
敵りしかハ引よる家康の先手陣より渡ほ指比
塩を挽つまへ城兵を追ひ追ひ落りて引上ケはほ志てるく
不て追と討割し敵大概ハ仕寄際を追止めしと
立倒され付ハ又柵際へ立並居て息を続も立りしかハ
へ曲渕庄左衛門ハ若党五人中間三人小戸板を畀
をまへ染りさて兄来り面もく写候ハ持奥の運
統勝虎口ニ向と勝ちて来り被負をさせ候所

久坐した故跡の今おして大方庄兵衛か見迎ひて
盗人にハと云る其為に刃を軍に於ふ志てと
闘ひ出る所く将市に於て初陣と云能首二ッ提来り
初首立てハと庄兵衛に見せ若ハ大の眼をむき
出し其首討りか何んの役に立り庄兵衛の首ハ此
入て城中へ忍ひ込て城を落して千金高名とも
可云と庄兵衛称か寒の年まへ冬の大雪殿の秘
蔵の士菅沼新八か参州北国の城を山縣佑ら
時夷赤々居年父て庄兵衛の中へ押交りて城中へ
行三十有人の党々着た其分後ふかへ城を定の居

小落したり。まだ其程久しい事でもなし
生れ下りし日かと敵とて呼しかハ秋山十兵衛様抔
しうて庄兵衛も云事さやか北国の城と此小田原と
一口に云物か十万篭りし城さや是ハ市来に柄
親優（こけ）りと譏しかハ由渕太郎に勝る親縁りとは
馬鹿な儀様小将に若き庄兵衛か武功を腰
か立ハ小田原の城へ押込さんすふこそ口惜い
とぞ云家立上ろんと志さるか縁の番へ助けし
さやし痛いて死ぬるくと戸板に乗せて連帰り
けるを笑ふものもなく家気者なりと感

もる旗も多く見ゆる我々よりまさりたと云こそ
て勝を立道理なれ他人に劣りしと云ハ歴々の家
遠りて記ともに甲州衆信玄公以来の口々
おまちしらぬ引入事

陣中裏切之風説流言之事
附 秀吉公当惑之事
并 細川幽斎妙之依歌伝へ有之事

去程に其日夜の三分二ばかりもしたるに攻寄せられしかハ
如何へ入此ときに城中と其の一味ありと知れる中にも
弓鉄炮を仕かけ物頭まで矢を放ちて有ける陣中

徳川勢の中に甲州衆と城内の者とハ敵味方
互に呼出して有故早武田の旧臣曽禰内匠信玄八十
人諸将及の右科落きなん侍追放せられし如
其上の太守よりハ小田原へ欠込小幡屋の士卒と
成りし者ども多くありて城内よりも見え其攻口の徳川勢
の内甲州衆も見知りし。互に久しや誰殿も無
事なりしか世の中そかしふ思ふ事あらバ
また旗も本意をとげん共に持よ甲州も昔の日
ていかなりと称しの事とや思ひ早速疑説を
云募りしに夜の声より始り沙汰云共なく若

より中にも家康ハ城中へ一味して羽柴か謀を
見届給ひに若ならりと一日二日と見合せけるに
又三枝蔓（ハビコ）りて徳川殿ハ小畠信雄なとも同心
給ひし由裏切の大変ありしと三日目の夜於
関白殿諸将歴々の元へ諸方へ使を遣し諸目付
然者内蔵助諸陣を右の通りにて諸陣中へ使兵
謀きけ大変なき内諸下知なとしよふ下く
石田小西も息を切て走来り当晩中に家康公
信雄公を不意を討よ諸向て終との事故秀吉ニ
此然と給ひ諸顔色を不平常にして皆りし

左様に汝等を謀し事なるの元秀吉も気遣ふ
様成とりて宮ハ大義成也天下統の秀吉公より
しハ床をたふと女部元四人おとし諸足をさし添
世話せんなとお静密に諸小姓諸目付を召し
福原右馬之助を召汝陣中の小屋々をあらため構
様と云とも届けられは宮ハ家康小係と一味なきハ
なにもる卒度脱走へし中にも亦に杯を向けられし然
敗軍と成所を七万の小姓城中より突出し
秀吉首をうたれたまひしと聞へし謀行の親子も
こハ仕方いせぬ若殿なりと家来に福原右馬之助

雑職に存して雑人をまじへ我小屋の中まで呼寄
裸になして家の外具の中へ寝させ道具の雑人
の廉服を着し素性あら飾成生の男なりしが
顔へ泥水を掛らせぬと試ひ。されば雑まん
足の長ひをうらせ丁寧に陣屋へを出り立ずさするに
十間に入る者は家康小条と一味城内より使来ると
云ふをれは徳川殿より密に使を遣され誠に一面
日の内さぐんと云しはり訴へば世多我弱の倚大和
大納言秀長の倚の者は道具拵をへ。に寄く奉行
兜角あし寝競し スハ と云は山の上より海まで

出て早船を討付て卸へるよりかれは者し萬百
人よ百人かなるふと思ひて居しかの所捌法を
て福原も勝家は是も麻衛に立帰り家老が
浪々徳寝の間へ参りて一に御筋に奉りし我は
開城敢むつくと起て サア 福原船に頼羅ぬまず
海ぞやと突ふやかしていつ替道へ物れ大坂
の家を出か知りて居てあや是は因果に萬と流石
大膽成者も音を立て動揺中も已成る事 殿中
係るれ人細川幽斎徳使あるなりしかは陣屋詰よ
斯よしつ徳庵の間へ参りてそよりし徳寝の間手

御煩し小姓衆出入せしかハ不縁の事有ハ
と云案内御霞の者へ仰しかハ関白殿見ん
ありし遊女由緒ハ定めてと大刀抜かれ起より
狂し故諸ゟ万事驚く事なき神妙の遊女ハ
所を潰し小姓衆何事に候ハぬ抱乳熱病
かと申少年香申や去る事母衛く秀吉動揺
の気色静り遊女し家康の異なと申しや
めけと申忍の下に遊女名人まりて辛くと思く
去りとハ下説を識と成りて名徐に深き候ハ
事結句危きなハ旅徒敵かしと変なる者

或ハ辰集等合申ハ次の成家康卿
遠りいりし都に足越の根えくれる下下説の虚ハ
三日中とも止ぬまて候ハと扶申此ハ元来遊女と
秀吉公一代弄学の法師花申ハ事説に不通
実依の人故秀吉ハ顔を成たるか申きう
此から若近ハ風ゟ募り陣中の大事不成に
発共思案し思案しと不申なりし遊女ん
失思案ハ九百九拾九ちゃ足しく懐思せよと
去来の號に座恋の字大事に当明日何
家康陣不入入ハりて茶湯を成并酒

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

寓言を絶ハまゐ中逸ミ風説ハ止ミ下ハ是を被
中しに挑智孫明の囲碁あり秀吉公御好武蔵
を囲碁危し斑猫を誠る秦の陽なるを忘しと
御疑ハ尚囲碁中よるハ私御供可仕ハ諸若臣合
一六の吉凶御好武蔵ハ稽古し奇き天下一統せるか
再乱とおとやハ此雑説る変しハ御迷ハるを
家康小栗一味のとなえを討下ハてい。奇とか御退
深ハ不可成ハ夜明けり朝の御縄を武意果し
彼州敵ま陣康く御供下ハとやく有之
世の中を思ひ出しく見る事々

我人さへ人をえなし
妙手詠し御眼人有りしかハ秀吉近年和碁好
人を碁御指南御囲碁の線碁よ自他平常の
大臣を就しるを早くを御得心有りく御手を
打手我囲碁を師とせしを諸人ゟ事よ存公家
の中よ何程も召碁講師すらはを元来武臣の
囲碁を関白ま御師範とハ事淫と名呉臣せしう
名存念有りく給けせり尊此時ふ大事の碁道
より軍兵の旅の愛をゆてり苦りとハく面白し
無より碁よ入形より正く入碁兵の策より軍門の

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160　　ガラス使用

はねとく名高き掛天しき額く墨蹟を作り尾張
踊析と去つくきつくと揚の仕形座中仕果
死ぬ程の逸興未ゆの諸程宜しより諸侯より是
物に余事影し然若名乃風ゆ忽止んで此有
家康公城中一味の御在は毎に虚説ありけると
其踊形やさしいは大猿なる秀吉せとんて江戸細川
玄旨法印幽斎の一首の歌に大猿なりしやと
ゆへ忽翌日は家康公氏公福を初め連達北畠信雄
公諸陣屋へも此所日の石手諸入らるく諸程興せ
其書大噪ぎ有とも諸侯り其成しかは只一日一夜の

内に虚説の風聞出きとやさしくは尤覚束祓
感方ぬ事

日本一統志巻第三十六終

日本一統志巻第三十七

目録

櫛手之小國勢取之軍功之事
附上杉家依謙信利家怒大將之事
并長田陣代次男源之幸村出勢之事
大道寺在城松枝落去之事
附武州松山之城小幡退落之事
并櫛手之大軍小田原入之事
櫛手小國勢小田原入行列之事
附上杉家馬印徳川家より許之事

并利家営ん宥て下知秀吉公ニ叶軍忠事

日本一統志巻第三十七

越中之小国勢変之軍功之事

附上杉家依謙信利家惣大将之事

并真田陣代次男源次郎幸村出勢之事

斯て當正月中羽柴筑前守利家ハ関白秀吉
當代并受領名之所讓状の侍極まて當代の
二の誌志なりしか在国の節しるに前ニ所召置
軍役相除き猿りと各存せしか正月蜜ニ御書於
所を越中の大将なれハ利家於侍輩ニなん世らく

氏政は秀吉のはかりいは大にして方皆押向しに又猶
より出るとも敵方若しく覚悟なり寡兵籠り小田原へ
籠る事なく殊の要害を構へし悉く籠城まし
人数の多能早く兵粮を尽しく取置きし人の心不
和にて成功までも却て籠城の基いとせし世間の
軍法と格別の思ひ故一向氏政は小田原籠城決
定せしは様々と殊の外の示しに合せけりは初春より
其心を手に取り漸く二月十六日加賀少将利家を出馬
なり肥前守利長共に三万の旗を卒し城中
を頼み越後の上杉景勝へ秀吉よりの
内意ありて入ける所前田上杉共に官位同く四品の
少将なるは元来は上杉家を猶且の大将と定め
可致事に他の子細は雖有し秀吉の存意有にて
武勇烈意上杉家に威勢有りしは六ヶ浦より北条
退治の後又国を与へん事は日の如なれは利家は
大将と思ふ心意を信じ又上杉家の家の下に立つ様
に其方大将なるへしと有之時内意故利家も越
後に於て思ひ元来前代の上に人ありし所家城中国
境何より信玄を以て慕ひ秀吉は利家の為り北条を可
退治しるえんに大手の大将は関白殿下両ありし猶まかへ

利家京勝相続次第よの後ニ在忠通士卒を引
具し再試に当て大将分と思召けり早く本拠を
引具し出生馬当て利家ハ手勢を見より
帰し馬寄りけるに其後の武略を可見ニ出る事
を葉後と上手を叙討手試しけれハ元来上杉京勢ハ
出る事を焼なる生死まで在山城守を討候
右に旨被召置可及落着有て直に志もし者
中にハ是の全利家一分の召置手まで一所ニ候て関白殿
の内ニて上らて登存候へ分補築東官領の本家ニて持ち
他家を大将分と御人事聊事を甲斐様ニおゝ

将軍家の大事の損益有る場にて詮ハ近年迄謙信
玄代より一年と合戦なき年を無なる事を斯波
多き地退治あらく国中治り士民安体是いまに此度
の事大将分と有る地出陣の上は当家の忠烈を
構へつゝ其連事分補まは然者戦場まて日本
国の大小名の威勢争とおもひは将に一入に勢何哉
粉骨をつくし武功を尽の上にも負討死ありて有
分補に然る時ハ後日当家の為なるかくしける軍兆
そは何人の事も恥く賊亡とおもへる有利家を大将
と云されく小勢まりく出馬の後不覚者安心

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

奉存いとや申ハ景勝も是をきゝ尤様に存なりと方
々皆々家の為を思ふ所なりと有て早速
利家は御勢を以て景勝年若にハ上にハ万事
不調法なる家なれハ上の御沙汰事なりしかハ信州まて出陣
合の第まゐまふり木曽へ利家ハ討あるて上杉の
為に兄の城をも奪ひ其后虚病を構出陣なく紀
春ハ家康とや一依三千の兵を以て春日山を出立
なりて信州へ出陣なりて川中嶋皆津城へ出陣
致居信州毛利河内守ハ秀吉より内意を得て
真田河内守を催し同陣せんとて其后河内守ハ

竹中半兵衛か軍配の大徳を蒙りせしハ秀吉ニ有と
其人の知るなりしか天正（本ノマヽ）年に至り其人
徳川家への同心を翻し独立して世間の様を
窺しに龍紫陣の様子まて推天下の大器秀吉
なりと観察し毛利河内守方同意せしかと其身ハ
在信州次男の源次郎幸村に千人の兵を付て
差上但し兄の源太信幸ハ家康方に極り父
子兄弟の中表向にハ何事内々ハ一和密会しけるとも
是を父昌幸深き所存ありける故に依て徳川家へ志
を運ふ事を遂るせもしけり其事有る様に討入

しかる去年より幸村を源治と名を改めさせ置る
此度関白殿より毛利河内守なんど疎相成し故に身
信州徳川領に有りて徳川家へ出仕させるさへいるゝ身
秀吉の威風に恐れて只今臣服するにとゞまれバ又
天下の成行ハ海とも山とも知れ難し只信幸ハ徳川家
へ志厚ければ此ハ秀吉へ召出る人ハ先事有る
猶よりて幸村をば小田原陣へ出しけるの帳への御
盃のよろしくやられハ治乱共に武士ハ進退の同利城
共に上まで此度の小田原陣ハ天下分目の戦と云事を
はかりし大軍押掛りて七ヶ国の小條を攻る事ハ去りとハ

長くなくハ河内守様去斤程痛し然共一尾を捨て
高名を心掛る様にはかりし身を全し一生涯に一度
ハ時の合戦の命運の興廃ハ聖人さくめりとも仕
難し只後代迄も名を残して大合戦の命なりてハ
命をハ捨何程と存れともやむしかれハ源治幸村
兼て定る所に定め若年にいはれ小軍将に命を果ん
とハ存ずれとも何れも其々の思ひありて小田原へ籠城
して小条方を仕天下の形勢を計る時なる軍して
いふ度中さいハ秀吉方ハ天下を残す味方にも怖れ柄
にはかりし小條方ハ只七ヶ国を城方として十九ヶ国

を敵に引請けれは何ても不能合戦にはなとん
中必の家を取立て此度の人数は足輕仲間の類
斗取出へし士分の者は悉く討死すせよと出るの
撰武者は寵愛の士斗を撰たれ撰武者と云ます
英卒あと云此度奥田か撰武者を後たを殊しらく
雜人体のもの斗を撰しれぬ々様異風の奥田之

大道寺在城松枝降参之事
附 武州松山之城明渡退散之事
并 關東之大軍入小田原之事

小田原より出向ふ小田原衆關東の人数は出家を忘引留
吹時と諸方推しけれは大將分羽柴筑前守利家
上杉彈正大弼景勝羽柴肥前守利長毛利河内守眞田
源五郎昌幸を始として都合三万余の勢松井田城
あくて先手關東の軍勢は小田原合図上州松枝の城を
取巻しとて無勢遠巻にして明早天より可責との
其夜中松枝城中評定しけるは當城のこと大道寺駿河守
政大事の時病氣家中生死をふ分軍の下知を執れ
同新四郎殿は若年なれは松枝軍配不叶我々共合
軍に怨の事仕出し負をは見ぬ其の後降參と
有らんは比與と云ふ不如降参神文此度忠の中

に上の国もとより旗の紛もなし此城ハ信玄
の時代甲州士小宮山丹後守を居置し城中の仕置
申来りし後ハ此国又手を諸りし居置し城の主
にも成ありしや其真田か為に不向りて捨し城なと
落城は疑ひなき所前に早く降参しける大道寺
の家名も続きて屈し小田原へ一石も残さず組して孫九郎
度小田原籠城しける時ハ今の当家の不忠と云すとも
しと大道寺家来云夜中桐沢洞しかハ東明に
使を出し降参いたし上方勢の先鋒を仕当国始
箕東向の陣案内して中へと中入しかハ其上方に参

利家を始猿ぬ大方の高名是なりとて大に悦ひ
手遣ひありて一端の降参人とも是ハ別して地支
し三月十日に城を渡され人質なく先鋒の案内
者となりて松山の城へ攻寄る大道寺方を先へ孫九
郎加馬尾州へ諏訪守出家ありて三男諸る
抑も松山の城は上田上総介ハ小田原へ籠城して
留主居まいに難波田因幡守木呂志丹波守合せ紀伊守
三人に城を預け弟山田伊賀守を為同代の武者頭
弓鉄炮大まに兵粮万事沢山に籠置此城の役ハ
先年上杉管領方の城なりしを北条家より攻

言謙信諸事を指揮し武田家へ加勢を
なしけれハ信玄ハ専ら北条氏政を尊ミ依頼し御救
初ての無心なきハと有て対馬を始め北条方を
切取しか云蒲原城ハ甲州士米倉丹後守竹把と
云ものを仕出し甘利左衛門武勇を震て攻落し
且御氏康より信玄の後方へ窺て城ミたれハ誰をか
可申付迚ての後ニ猪谷をも遣りし所信玄ハ自
他共ニ勝因を絶し様ふ大将成し故先年諸若
與上州ニて引廻当時嶺を懐ニ而武田家へ貴掛り
し士大将十八頭の中ニ上田又次郎依て度ニ及武

田家の敵ミしたる方へ向ひしか近年浪人して刺弓矢
を止閑楽斎と号し上州信州を経巡り居る此
仮を為て計及閑居小泉氏康へ专許の使ヲ立
ニ上田又次郎入道閑斎来計て先証の者此城乃
包しる由兼候ニ依て是を可然付と度勝引有
し故氏康所を遣し説是ハ不承にて御出来ニ上
田又次郎依ハ北条家ニて味方と成り敵と成度ニ度
ニ及ひ其上法性院殿へハ天文七年中上田又次郎会
楚野六郎か纤賁ルと成て敵前に於て笛吹峠余
程後を待を掛し軍の仮名ハ云上田又次郎入たを

城をとらハ思ひ遠ふ所と誹り給ハ信玄寛雲と
諏訪家ハ氏康ニハ恨深きなる人間也
なを含み中ニハ忘れす女狐姓とハ云ふ事日本
戦国の宮中なれハ一郎二郎の領を城主共程々ニ
分を落し敵と成り味方と成りし一度ハ大身ニ成りし
家名を失ひし度との存念より事起りハ然も尤也
ニ可惜ニ可恨ミ候ニ終つハ敵ニ背りしもの也
武田領ニ離れ牢人し他流浪とも有ハ笑止ニ方ふハ
信州の真田弾正忠上兄の小幡上総掾在浪人他国を
立退ハ武信玄陸奥挑持為被偏余にはハ心此頁

中ニ武田家なハ一分の肉身のもつく存ひ上田も出度
城もと諏訪ハりく小笠原家の為に於ハ抱上州安双の宮
臣とる人々氏政若輩ニハ取ハ大将たるもまつの
情を常ニ掛人を立ハ探ニ人を捨ふ捨探ましく心
得ハか肝心の事なり
人ハ堀人ハ石垣人ハ城　情ハ味方
仇ハ敵なり
此心ありハ大将もと下ハ上中下の貴賎此心なく
世ハ治りハ士農工商の面々和も兄弟ニ落く正道
ニ歩ミ可申事かりと諏訪ハ小笠原の諸大将方

士卒まても感心し。誠に法をよく守れるにや信玄
氏康は信玄の法網中を厚くし然思しまり日比
悦びなりし上田又次郎入道も故右忠が松山の城を
然成平さもに其法志を存又次郎入道病死す
と先成田下総守持ちたり謙信の後方へ氏康降参息
三郎殿を養子として北條上杉の弓矢治り関東静
謐せしは上田又次郎入道の取扱なりと覚へし北条
上杉幕下の名臣も年々に死去し家人も浪人士
の歴々も未だ仕（ツカヘ）しは存のむ上田家繁昌なりしか
晋氏政死去し其子上野介家督しけり城は要害

よし弓鉄炮兵粮不足はなし何年ふせぐとも廿日三十
日ほどにて落城するは叶ふまじと此度
落城せしは内通の事あると風聞ありて其内証を尋ねるに若
城主上田上総介出頭家老の雑賀田関某といふ者
上総介寵愛の小姓よりまた至極の美男なりけるまゝ
上野介同代として若く覚しける山田伊賀守と云者
年は猶若かりしも若年より武功を顕しける事
度々なり殊に数頭も出覚へ掛も揃へ不断の
不男なりしか伊賀守が妻は三十餘りまで至極
の美女未だ見て見ぬ程は廿二三と云ふ程なりし

常ゝ夫伊賀守を睦むと云へ共上杉官領討殺の
家人の縁なく別段没落の後ハ兄弟親類も討
死し有り遁竄しけり今ハ其人も頼方なき身
なりしかハ不及是非流浪の旨山田ヵ方へ縁付来り
心中ハ不深といへ共空敷月日を送る処鎌田ヵ男
振りよ思付し折々鎌田も此美女に泥ミ人不知
手束の文を互に交しけり折を窺ふと云へ共
山田伊賀守丁寧成生なれハ中々万事油断なし
殊毎事振り取持すれハ宜敷人を付る意度志てる
男故遠しき窺ひ鎌田と出会事も不叶双方

の思冨士ヵ浅間の山鏡と筆ニ思ひしし付を
知ふとし処此度小田原箕輪城ニ付て已ニ上田
上野介ハ小田原城より小田原へ相詰る処出仕
人し重れ鎌田を召連と申付しに心中ニ一物
ゆれハ虚病して供せすして留守居の人数ニ残し
置ける処相模の小國勢上州口へ打入る゛油断をせ
より城の留守居を厳しく致しけ諸戦の云合毎日毎
夜の出合の御鎌田ハ急ぎ此城落去せハ主綺ニ
此女を可引退と思ひの遁しけハ不ゝ嫁子をとりてく城
を敵方へ渡し小田原の主君上野介殿本領葉猪の忠

并ふし給へ迚、小泉家天下を引請、長篠城にて叶
と申出せし故、城中にては此者の働多しと云之云
同代ふ謀擬しる程有て、言を正し、敵方は主人之為
忠義を立る輩ありしと一旬の命を借る故、左様
の者を出来るも如し。其後は同代とは老は上野介
取なれは中功よ城内をいまた立しも年来ても
力は七八人思量有、伊賀守手柄ては上田か差別
三千人の中にて名高の利なり
武者頭の役なれは、誰にてもまいと答ふるものなし
依て難波田も当惑し、伊賀守へは只一筋に讒申せし

左様まて讒申なり、何を云も忠の道免とも老功
の貴殿ある者まて背くしと相談する故、尚以て城内の
者は悉く伊賀守に依て籠城思ふ者の手度しと申
皆を侍衆より遊ふに此難波田氏の内に思ふ様たは
云へ、敵方手にては密に出し城を渡し敵方へ成るとも
伊賀守たりとも殺しての後、年月思を遂し女房を手さ
可入とんも申すに思ひ廻し、右流石伊賀守も前ふ知、日夜
引謀之の席ふて家老三人を集め、やしを
不隠云合せし、依之の後れに山田伊賀守は武
者頭として、忌君上野介同代の役ありしは本丸く

居木呂志丹波守に命して二の丸を難波田
因幡守には若役なりけれは大手を兼て一備せしめて
守らしめは甚宜しき役割海野兵部家老臣
并も大手と二の郭との間なれは城中まては行
事を考へしと右案堵して山田伊賀守は妻を
我屋に置きて自身は本丸に居たりける
其程に小田より押寄る猶手の上方勢押来と
筆并混して城を巻き諸将明日より合戦と定めけり
しに夜中密に難波田方より一の責口成る毛利
河内守方へ矢文を以て裏切を致すを申遣して先軍

を止め同役に本呂志守方へ施前る利家丸
判形して申し頌安堵の證文を給りて其へ夜明
方に来るへしと大手二の郭の分は敵方へ渡すへし
しかし伊賀守方へ内々ちまし落しめて内せよ其
家にやりける和睦も殊も良君の不為なりと云しかは
露程も不知忽城を渡し迫に寛きし小者に妻
子を連引立るに成り漸く山田伊賀守も難なく
究竟手敵陣より検使十人余を外究竟の兵とも
五百人大手二の丸へ引退しかは伊賀守も既に果
すはいは犬死せんも無念なりと本丸を明て渡せ

其内に女房は新波田と内通せし事なりければ人を
添山田伊賀守が家来云女房を囲て引出し奴を此
謀叛人をも見付る者を尋と云残功殺し田舎
の片例なる新波田が同を至し百姓の家へ忍
しければ本のまゝ山田伊賀守は妻の行方を不知して
出城し處々を探ねてと云へ共一向行帰不知山田
伊賀守熟々工夫し是は偕に妻が英名を思ひ
入りて出城の元盗ぬかと連行しその形さんと我
妻が派りし闘八州の其中に諸親類友人もな
し然迷誘て成るへし女め憎しと處々へ札

を立しに山田伊賀守妻松山出城の元より行方
なれ万一国是者あらば士民に不依見掛次第助千
にもて差引異し來る者有らば百両の褒美を可
遣との形ずつ山田伊賀守と札を立て尽源伸召た人
毎日く探し尋行ければ羅波田が彰君なる百姓
此札を見て夫人家し百々頼母子法くと云も此城
繁昌の内の事なりと城を上地せ成行末の
程ふ知覚我共当家来しる新波田も本願寺緒は
ありやて追放ふ可ありと未の見助ゆれ新仕え
近年の国宛を百両の褒美ふと取上げをて出と

思定め隠し置ける妻に向て額田屋へ仕合能
本領へ安堵の由仰られ諸共を同道して来りけれバと
五の徒侍共親類百姓共人足まで集りける程に
夜に執行を以て早々及越して有と語りしかバ
八重垣度密まで額田が仕合能くと聞て取る手の
悦ぶ前後の弁へも無く立出ける豊馬に女を
乗せ簑笠を着せ百姓共三人付添山田が宿
陣へ急と百姓の内に男を先に立雨中へ出て女房
を内へ入しかハ山田伊賀守大に悦び来り急ぎ合
百姓を皆帰し女房に向て僅頼もなく有り

の使有額田が年来の恋慕より此度出城の節
引れし事共を語し故山田ハ智有者のなれは
妻に向て汝には早く知らせけり何分少しと語
方に見方便を構額田方へ立そ其者を我方を
呼出し落ハ男盛の故妹背の契ふ味過年を
打未だ同然其方ハ思ひの事なれは何となく
其方さへ額田へ添度が実の心なれハ我合体
してきと謀る者を立と思ひて妻ハ涙を流
し命に不て只々然れ共存命成て下と悦び
故に後より其者中々に何とも妻が方より細くと

書中に右之趣を出合て女房を呉れ候はゞ
ひそかにしれハ難波田ハ未程の所望すとも絶て男
なきを云ふ女と云ふ桃山の女房此方に行しては再三
無之事に叶ひ實ハ山田伊賀守も甚だ未熟の御仁
に持て故明白に異なる其の奇しんと思ひ出して山田
伊賀守へ行ニ人出合て使者を出事告れ申しに
山田ハ盃を出させおしてを桐違なき容子に見え
しかれハ難波田油断ある所を構ずに難波田紙
其家臣に切放女房の所を腰の藩々を責
違に到るに残ハ切してすこし此言利家へ相届に

而山田ハ慶長の頃より出来。是れより大道寺ヶ松
枝の先に二の丸松山の城を山田伊賀守る引
具し悉の松枝も掘を掛しかハ成田当る指挑
そのままを定まる兵し関東ハ十一ヶ所小田原
幕下の城々を悉く本領安堵の約束しに償
を強へし利家小国勢三万五千人の外に十ヶ所
の城々を皆ニ万六千余騎を率ひ六万余騎の軍
勢を引具し四月廿一日の宣小田原合津有り
しハ大功なり獨り勢何程備ふ云ふ大なりしハ
成功之後跡なる△ト秀吉を頼思ふ所なりの遠

成しかハ利家ハ智仁ある人を招き敵味方共ニ不
慎様にして手当る故如形不日の静謐ニ治
しより小田原落城の之ハ搦手の勢十一ヶ所の城々
を落し上杉武功抜群なる要害ニ及一戦ニ
落しより小田原篭城の人々家力を殺し終ニハ
本城も落る事と答聞へし

搦手北国勢小田原へ行列之事
附上杉家馬印徳川家より許之事
一、并利家寛宥之下知秀吉公不叶軍兵事

関白秀吉ハ搦手之大将分羽柴筑前守利家を始
上杉真田之外六万余の勢三陣ニ武者立をせ
見ニのりよの事なく小田原入之行列次第を守て
列を行申すと上杉家より大旗と云ハ謙信より
代より之止上杉家之惣旗と云ハ紺地日の丸ハ
大四半旗其の旗と云ハ是も緋地ニ毘の字の小
四半より其外旗なし士大将一手ニ悉く小四半
成を持し関東勢見え有りし京勝ハ対面の為
出之ハ源石上杉家の武者押し適し見物事之
兄去大将旗本の馬印なき故本陣をふるんくと
其悉く大将馬印を旗本ニ立ハ京勢すると

馬験を取立て然とも上杉は扇景勝御存意まゝ
其後ハ万事不識院の形をおし遂ふ申ん
願故何事も先代在馬ニ後ハ別ニ謙信代
の通ニ従ハと取行し后其后関白殿時斎乃
字よふ望駿河大納言家康公御上座ニ乃しつ
景勝様本意ニ後ニ存ハ万事御孝ん
感入ハ是迄今日本悉く一統の世となるハ実
ハ大将を帰ハ相公馬印を取持せ給但し
御心ニ任せる馬印高分出来帝ハりて細工の
扇の馬印を差て申候と御述ありを人秀吉此

仏と和き京勝も兵後馬印を取立ハ模とよ
御事なり候く京勝依然とし徳川殿の令
の扇の御馬印にて諸軍の中まと勝しる事
認ての通りあるくと由ニ御定ます家康卿
も一百年御様将ニ取行御記後取成志えしれ令
秋も助しし扇御縁ロニ取結しる井伊直政ハ
家康公御感念を万事呑込しる人故取申ハ家
ハ令の扇の馬印ハ姉川合戦より上方御働へ富き
越前乱入の御手筒衆を信長公十万の勢ニ而
落し並猶し其外百人の徳川勢まと攻落

しらぬ者もなかりし金の扇と十萬の勢ごとく
其後幾度か日本の軍勢見及長久手の合戦に
十六万の上方勢を追返しける金の扇此馬下只今
歌ふと語るまじと高くかゝけれは関白秀吉の
律言にて又く兵船の廣言も久に十六万の勢乃
大将は其武や隊り鼻の先武やそと語哭威
乃ち又は京勢は家康公を諸人仰ぎ申かゝ実は日本
國へ知らしむる金の扇を果々語申さんと隊々武
功を顕し申すたし上杉家にも特料の武威にも
人並ならぬは扇なれは申語一し但し是を

證ても有る御意の扇の馬下を上杉家に
御立被下しは天正十八年卯月十五日の事なり伏見
秀吉公仰には真田は六文銭旗の紋なりしと
有けるを此若年源次郎進出語候やけるは我家
思ひを語る事なれは人の知ぬ所は昔より只今
六文銭と申すは七珍万宝の山を定むし諸侯王も
戦（カラシ）一つと成る銭六文に井と兼る真田家の曽祖父
常にも生を存とは存ぬ申すけ世は旗城は勝掛体
むも中の年中只死せと存は故あり六文銭の
六文銭を一人の葬送と旗の紋に仕るは萬代

より古来真田ハ陶ヶ定役呈今於東家中にも
云ふ家長乃其若輩成源兵衛大将元の見侮り
おし存候禮もいりんぬ示々六道銭死身と説
もち肉身へ於其迄太刀力おも戮候と存ぶ申也
賜詰しる顏混吉今謂家の若者被秀吉も感し
給ひ及此種有相毋し若年成とて官ぬ何某
官位さ先へし従五位上た衛門佐ぶるへしと云う
しかれ一言の武意を仰ぎ立座一階一級官位有
進し領捨と云大概家頭の諸大夫従五位下の
如く御前にて敍任候は生涯不従五位上左衛門佐と於候

尉なきれハ位階ぶ望処く没是死佐と於めし是
幸村幸於う若年なしとて其々官任の後藤
家存居しる如諸大名列座の前にて官位叙任
の後に勝手論し申を見しかハ幸村ハ大勇士
の信友初一言を無し一度御事秀吉に入と伏
せし数未くとも二人旅き二代の使体方へあらし
とこのや
然るに此者話より利家の大功を大於今の事重く
御賞美あちる呈一應付度の軍功抜群る所く表
候成ふんと毎於佐志りしの為兵於一向於詩今之人常

ふかく清忠志他に異る利家の此度ハ一入清感てら
たと此ふ審就時関白殿近習の人々ニ侍り清猶中
の一物聞届られしに利家清之の沿まり秀吉小胜
近習へ向ひあくて文尤あり寧りよりしか物を弥ふあ
名人男経ありて此度獨まの大名を上杉名くと有
なんハ極たる家柄なれ共上杉家まハ法勇の士あ
多しけ度関八州を揺動ふせんと思ひ働一揆
る時ハ敵方ふせと死を極め防戦中く早速静
謐ハせましきと揺方人の法人を備けまし侯く
物事弥ぬ尽積りの名人男を獨まの大名分と

定立しかぬ楽寧ハ仲連流じや仲中か集も玉子
去や物をと弥のお法自慢なりしかかし召ちらし
於候しハ然共此度関東十一ケ所の城の内ても
最寄貴殿しても武ふ心揺動して武威を示しか
またま上方勢の武勇もしき所ふ如利家勝りと云人え
衆なりて揺斗ふひ敵も人も不討れ事此家形侯
なまきと法是試成しに候を利家忠志の方ふ法示
の思召ぬれと告来りしかハ利家も頷(ウナツキ)き猶ふあ
ハ寡白殿此度のいしし方容ふふ入如ハ旨なくよ
しくけきハ武州すれとも八王寺瀧山の両城斗

を残しける是ハ名ある一廉ニ小田原氏政の弟陸奥
守氏照居城なりとて大将分の氏照事なれハ伊豆
陸奥の人〻先駆を致しけれハ八王子深沢山をも
麾下の可攻手と閑中段不免延十ヶ所の城〻
を西手に請れ中事大将の諸手勢を一列ニ守
く合せ度なき存候けれ共陸の押揃を〻く
早速落陣しけ〻諸手勢と斗存し故生国柔
弱の弓矢の取立〻と思ひ居り前面同に然ハ氏政
弟陸奥守氏照居城人数持と云八王子の城を
よ残し窺〻気色角とと見え〻条陣仕合可日

取立八王子城山を攻て貴く落し小田原城中をも
頼み〻〻様子後に攻て手〻り小田原落城程なる
まし〻〻其外は同三日の早天に可台閑中段開
前利家ハ中分常の押揃と達しける万一守なふ
一ヶ所に城をふ斗仕ける事まても有と仕損しては
小田原落城の後り取成は当段弥後は将連
本村常陸介を軍手共に引添しかい早小国勢
府中より寄立おる押〻に上別表深条の府中
大道寺駿河守政繁松山の上田上安房守松小幡上総
介を始として一万五千先を〻進〻一戦の功になな

順楽坊を可差遣と各算ひ然有る能中京勢
方よ若干の勇士にあれ共十ヶ所の城まで毎一度
も軍なれ事を憤り余内跡の押くを去りてき
陣押られ太刀長刀ハ治着の勝を塞きて弓鉄
炮ハ室(コモタイ)に不持して来れハ旅(ヨ)りた拍と口説限
し事なき者ハ一番まく押出し八王寺を不究ふ
一里に押詰まるる如先んくとなるの人数すて武者
押の猛る勢に味方を究しうと上杉先手の若
武者共勢てよ中れるハ先手一ゑ猛者ハ殿付
とや関白殿より待応れ出陣の先陣ハ上杉

京勢当ての中道を開きて上杉勢を防置し
其の合方ハ二陣に残きぬ中より然るに謀
者る如先鋒の中より是ハ前田左近作章村
大数あるに関白殿ハ魁の者を幾人か作す
ぬ今日八王寺の城責まハ真田に先手とぬ
付たりと是も又虚説の謀言を出しけれハ上杉
方まハ為ハ真田か義ならんと却る疑ふも可笑か
りし然る如八王寺の搦構ハ雑兵共八拾人程
守り居たる所大方何足軽ならしかハ敵勢共
書ある者の行付所を不事親して不求構

の内にありし亦人斗書子ふ持若その斗残し家之
出行見弱を示して汗付る為に湛を見たり残
当の者云然寝入居る故人家ふ立を見皆た
るは真田源なりり当年廿家政りと云へ云又
昌幸生害しの悲嘆にて運家も天然と年し
きるは斉代の名君なり殊に家に真田父の君
を下知して此無雙の器は從に人にし尤る事
そ有とても物の用に不可立人家一物ふ立と
静くと押入しる業のなく寝相ぞれしるは二十
人斗起合る示を行擺より功外しく首れ候八

王亭怨構の一番家は真田左衛門佐幸村と名家に
多は各頭も事源りなし單に作木村君隱れ家
来て賞歎せし如へ上杉家総豊は先年は信州
真田へ討伐せられと同じ事は木村をして一人に
源る詩豪はなし小國の人との詩豪ありしと将校
なりしかは上杉家服を立まく若武者云百人
斗真田一云をれ歌し虚云をれし恥推せよ
と憤激しを真田か侍へ通付来る如を左衛門佐
幸村云哉まへ歌しる一矢子て家の試度所を
をりは日本へ営恥辱と早速老て将顔炮を然子

ま諷と張出させ自身ハ馬より飛下りて纏をとれ
とて大ニ杖ま突たちま采配振りよう鞍上の乙田今来
まう上杉家の若武者是色き法るを従順合戦ニ岩屋
によりて功ハ阿波守ま留守ますこ計ら爪を噛く
とて御出去とも法遣り恨をきニ甚んと味方をとも
見えにきゝ一先をたてる武者立そ物るを云せて我
出せしを筒先揃くて押張りて矢をえらて押つよ
上杉元雨を洗し味方我か康忽出たるを云を
一手耳くふ入風情奥田の後々より掛ると見えせし
不掛甲乙我達の押大鞍を上杉方ハ一万如糸血

分野との奥田ニ任法の闘諍よしなりしぬも
穢家なき田氏と止る事ハ毎度すゝ引上引
たる義勢武者立桐園のき敬人家を拉く
玄の采配去今この若との形摩

特3
1

日本一統志卷之三十七終

藏書之記
海巢村
幸田氏

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』請求記号 862-160
ガラス使用